

# 被災地における 児童およびその母親への援助活動に対する実践 ～岩手県陸前高田市における 絵本等の読み聞かせ活動への支援と母子保健活動から～

小木曾隆臣\*1 山田武司\*2 日高 橘子\*3 児玉 陽子\*4

はじめに (岩手県陸前高田市の被災状況)

## I 岩手県陸前高田市における絵本等の読み聞かせ活動への支援

1. 絵本と読み聞かせ
2. 支援の定義
3. 支援活動の立脚点
4. 支援先の概要
  - (1) 「あゆっこ」
  - (2) 「ささ舟」
5. 関係の構築とメンタルケア
  - (1) 関係の構築
  - (2) メンタルケア
6. 行為者への支援

(以上、小木曾、山田)

## II 母子保健活動の現状と課題

1. 「丸ごと支援」の開始
2. 被災者のニーズの把握
3. 保健福祉におけるハイリスク者への訪問
4. 母子保健事業の開始
5. 震災後の子どもたちの課題
6. 震災から半年後における母子保健活動の対応と課題  
(以上、日高)

## III 読み聞かせ等活動報告

— 陸前高田市での絵本の読み聞かせ等プログラム —

1. 読み聞かせ等報告
  - (1) 2011年9月12日(月) 「あゆっこ」
  - (2) 2011年12月6日(火) 「あゆっこ」
  - (3) 2011年12月6日(火) 「竹駒小学校」
2. 全体の所感

(以上、児玉)

おわりに

引用・参考文献

## はじめに (岩手県陸前高田市の被災状況)

2011年3月11日に発生した東日本大震災前の陸前高田市は、岩手県の南東端、太平洋岸に面している人口約2万4千人の農漁業を中心とした街であった。山々をぬって流れる気仙川が広田湾に注いでいる陸中海岸国立公園の南の玄関口で、日本百景の高田松原をはじめ、山、川、海の自然に恵まれていた。その街も、東日本大震災の発生によって市街地の86%が浸水し、被災帯は47.7%にもおよぶ大きな被害に見舞われた。

2007年度から3年間、市では「子ども読書プラン」を進め、図書館では「子ども読書プラン」に基づいた子どもの読書支援活動の推進に向けて各小学校に読み聞かせボランティアを養成し、資質向上も図ろう(『東海新報』, 2010.9.21朝刊)と取り組み始めたさなかの震災であった。この震災により多くの小学校や保育所・園が全半壊等の被害を受けた。また、図書館職員が全員行方不明または死亡し、建物も全損といった状況に陥った。このような状況の中で、子どもたちは心に傷を負っていった。

本稿では、以上の状況における子どもたちと、その子どもたちを支える母親に焦点を当て、岩手県陸前高田市における絵本等の読み聞かせ活動への支援(読み聞かせの実践と絵本の寄贈など)、および母子保健活動の現状と課題<sup>注1)</sup>について論じる。

\*1 岐阜経済大学社会福祉実習助手

\*2 岐阜経済大学准教授

\*3 名古屋市職員(2011年度 陸前高田市派遣・保健師)

\*4 名古屋市職員(図書館司書)

## I 岩手県陸前高田市における絵本等の読み聞かせ活動への支援

### 1. 絵本と読み聞かせ

震災地域において絵本に注目が集まっている。『朝日新聞』(2011.9.5夕刊)には、「生きることのかなしみも、よろこびも、美しさも教えてくれる。震災後、絵本の力が改めて見直されている」と取り上げられたのも一つの例といえよう。とはいえ、震災から1年もたたない中で行う絵本等に関する支援に対して、そこまで必要なのかとの批判もある。この点について、「優先性だけが緊急時の大事ではなく、むしろ優先性のないものを大切にすることが潤いを与え、回復への力を養うのではないだろうか」と述べている野田(2011, p.202)の考えに着目したい。絵本には優先性がないかもしれないが、『心の基礎体力』をつけるのに役立つ、とても奥行き深いメディア(柳田, 2005, p.298)であり、「絵本を読む習慣をつけることがストレスマネジメントになり、やすらぎが得られるようになる」(岡山, 2009, p.550)のである。

今般、震災地域でのメンタル面の問題が大きく取り上げられてきているが、こうしたときこそ、絵本を大切にしていくことが地域にやすらぎをもたらすのではないか。加えて、「親や大人の前では自分の不安や苦痛に必死にたえている」(本間, 2011, p.100)子どもが多い中で、「絵本は子どもたちを物語の世界に集中させ、感情を表に出させる機会になる」(『日本経済新聞』, 2011.5.9朝刊)ことから、子どもたちのためにも絵本はひと際大切にすべきものであらうと考える。

### 2. 支援の定義

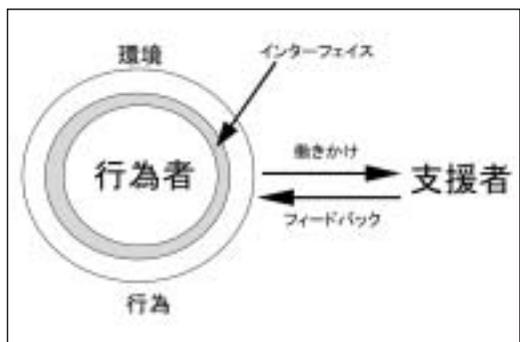
支援は日常的に使用されている言葉である。『広辞苑第6版』には「ささえ助けること。援助すること」(新村, 2008, p.1193)と書かれているが、これだけでは支援とはどういったものであるか見えづらい。支援については、今田(1994)、菊池・飯島(1995)が定義づけを試みる研究を

行っている。今田(1994, p.118-119)は支援の意図に着目し、①「企業に役立つようなアイデアや知識が得られる」「企業の社会貢献に役立つ」という考えに基づいて行われる、「管理的発想に従属した支援」「目標達成的であり、機能的な発想からする支援」と、②「利益享受を前提としては成り立たない」「意味領域における支援」との2つに区別している。

菊池・飯島(1995, p.90)は支援を行うに当たり、対象としての行為者の関係から「支援とは他者の意図を持った行為に対する働きかけであり、その意図を理解し、その行為の質の改善、維持あるいは行為の達成をめざすものである」とし、「このとき働きかけを行うものを、支援者と呼び、支援を受ける行為者を、被支援者と呼ぶ」としている。(図I-1 飯島(1995)支援の構図参照)

本稿I・IIIにおける支援は、被災地での子育て支援、および小学生に絵本の読み聞かせを行う団体の活動に対して、働きかけを行いつつ、何が必要とされているかに腐心することで、さらなる望ましい働きかけを目指すものである。その点では、菊池・飯島の定義と意を同じくしていると考えられる。よって、菊池・飯島の定義を本稿での支援の定義としたい。

図I-1 支援の構図



### 3. 支援活動の立脚点

東南アジアの内陸国にラオスという国がある。ラオスは口承文化の伝統、また長らくの植民地支配等のため文字文化が遅れ、本の出版、特に絵本をはじめとする子どもの本は不足している

のが現状である。その現状に対し、図書館司書が中心となり、「自治労愛知アジア子どもの家プロジェクト」(以下「プロジェクト」)が立ち上がった。「プロジェクト」では、日本語の絵本にラオス語などの翻訳シールを貼り現地に届ける支援、さらにはラオスにおいて絵本を中心とした図書館の建設、運営支援を15年にわたり行ってきた。筆者の小木曾、日高、児玉はこの活動に関わっている。本稿における活動はこの「プロジェクト」の経験を抜きにしては始まり得ないものであり、「プロジェクト」での経験から行為者のニーズは刻々と変化することを念頭におかなければならないことを学んだ。旧来の支援を踏襲することも必要であるが、「プロジェクト」ではこれまでも状況の変化に柔軟な対応をとることで、進展が見られた場面に幾度となく立ち会ってきた。こうした経験も踏まえ、陸前高田市においてどのように支援活動を進めているのか以下に示していきたい。

なお、本稿Ⅰ・Ⅲの支援は、筆者の小木曾、日高、児玉、山田、および「プロジェクト」のメンバー、ならびに図書館司書等が中心となっていたものである。以下にこのグループでの活動の主体を「筆者ら」として示すこととする。(本稿Ⅱの支援は日高らが実施した。)

#### 4. 支援先の概要

##### (1) 「あゆっこ」

「あゆっこ」は、陸前高田市の子育て支援センターであり、2005年9月に始まった広田保育園地域子育て支援センター「にこにこ」に続き、気仙町の今泉保育所の新築と共に併設された。「にこにこ」に比べ、市の中心部から近いため、利用者も多かった。

対象者は就学前の児童(1-3歳児が多い)とその親で、親子がリラックスできるように、手遊び、体操、絵本の読み聞かせ等や季節感のある製作(例:クリスマスリース作り等)、企画を実施してきた。

2011年3月11日の津波によって、「あゆっこ」があった今泉保育所が流失した。半壊にとどまった「にこにこ」の広田保育園と療育教室(ふれあい教室)と連携し、3カ所の「巡回遊び場」を5月より毎日展開していたが、9月からはそれぞれの活動に戻っている。2011年12月現在、「あゆっこ」担当職員は2-3名であり、2カ所を曜日ごとに移動して活動しているが、まだまだ落ち着かない状況である。新しい「あゆっこ」(2012年2月開所予定)の拠点づくりや、保育所併設時にはあった保育士の助けも借りられない状況に担当職員は多忙を極めている。

表Ⅰ-1 「あゆっこ」への支援の経過

2011年 6月上旬	絵本での支援を見出すため陸前高田市入り。名古屋市職員で陸前高田市役所に派遣された日高が、児童や子育てを管轄する社会福祉課に連絡を取り、「あゆっこ」の存在を知ることになった。その後、「あゆっこ」担当職員と連絡を取り合う中で、日々の企画がままならない状況にあることを把握していった。
同月下旬	小木曾より「あゆっこ」担当職員へ連絡をとり、参加者等の状況把握を行ったうえで、絵本の読み聞かせ等の実施を調整し、8月下旬、9月中旬に実施することになった。(「あゆっこ」担当職員からは、9月中旬実施分には、十五夜の内容を取り入れてほしいと要望があった。)
8月下旬	現地にて絵本の読み聞かせ等を実施した。その中で、絵本等が津波に流され不足していることを把握し、必要とする絵本等の支援を申し出た。
	「あゆっこ」担当職員より紙芝居10点、絵本等15冊余の希望リストが届いた。
9月上旬	「プロジェクト」より、希望リストの中の一部と紙芝居の台を発送した。

同月中旬	現地にて絵本の読み聞かせ等を実施した。使用した絵本等の一部を「あゆっこ」に寄贈した。
10月上旬	児玉より、手紙とともに、「あゆっこ」で活用が期待できる絵本、種本等を担当職員に発送した。
11月上旬	小木曾より「あゆっこ」担当職員へ連絡し、絵本の読み聞かせ等の実施の調整をし、12月上旬に実施することになった。 (「あゆっこ」担当職員からは、クリスマスの内容を取り入れてほしいとの要望があった。)
12月上旬	現地にて絵本の読み聞かせ等を実施した。使用した絵本等の一部を「あゆっこ」に寄贈した。「あゆっこ」担当職員からは、次回訪問時には読み聞かせ等の実施とともに、時間をとって読み聞かせ等の助言・指導をしてほしいとの要望を受けた。
2012年 3月中旬	筆者らが現地訪問を予定している。

(2) 「ささ舟」

「ささ舟」は2006年より、竹駒小学校を中心に絵本の読み聞かせボランティアを行っている団体である(写真I-1参照)。読み聞かせは毎週月曜日の朝に20分、メンバー6名によって各クラスで行われる。『教育家庭新聞』(2011.9.19朝刊)には、

「『書く』ことはコミュニケーション力、創造力、学習力などの育成につながる一として、書育推進協議会が募集した『書育実践賞』は、大賞に岩手県陸前高田市立竹駒小学校に贈られることが決まった」「大賞の竹駒小学校は2004年度から取り組んだ国語科の『読む力』育成の研究を、19年度からは『書く』活動を軸に『話し合う、発表する』活動に発展させ、国語科以外の各教科でも取り組んで実践を進めている」

と大賞の受賞とその取り組みについて掲載された。「ささ舟」の行っている絵本の読み聞かせは学校の教科の一つには含まれないものの、「言葉の獲得に大きな効果を持つこと」「考える力を伸ばすこと」(伊崎, 2009, p. 46)に効果があることから、受賞には「ささ舟」の地道な活動が少なからず寄与していると考えられよう。

「ささ舟」の活動する竹駒小学校の子どもたち(以下、児童という)は、被災後3カ月がたった

写真I-1 打ち合わせの様子



左側が「ささ舟」 2011年9月中旬

ころでも、がれきの中を警察官に伴われ、不安を抱えながら登校せざるを得なかった。「ささ舟」は、その子どもたちを心配する校長より、これまでの読み聞かせ活動の再開を依頼された。しかし、「ささ舟」のメンバー自身も極度のショックと疲労で声が出ない状態であった。またそれ以上に、「ささ舟」のメンバーが蔵書が頭に入るほどに活用していた市立図書館は全損し、図書館職員も全員行方不明、もしくは亡くなったために、絵本の調達を相談する人がいなくなった。そのため、どのように活動したらよいのか見当がつかなくなっていた。

こうした状況の中で、「ささ舟」のメンバーは、

「どこに声をかけたら絵本が手に入るのか」と心当たりを訪ね歩くが、行く先々、震災後の手続き等で精いっぱいであった。

さらに、陸前高田市には全国各地から支援の本が届いているにもかかわらず、市役所では図書の整理まで職員の手が回らず、人里離れた旧校舎に段ボールごと重ねられている状況であった。2011年7月、他県のある書店の倉庫から内

容の確認もままならない中、いくらかの絵本は手に入れることができた。「ささ舟」のメンバーは、読み聞かせの対象年齢を十分に考慮して「ただ、いくら良い作品であっても、家族を亡くした子どもがいることもあり、怖いもの、悲しいもの、海とか地震、死を連想させるものは使うことができなかった」と話す。

表 I-2 「ささ舟」への支援の経過

2011年 8月下旬	筆者らは8月下旬に市内の高齢者サロン「お茶っこ飲み会」にて絵本の読み聞かせ等を行った。その際、筆者らが持参していた絵本30冊余の活用先を求めていることを山田が伝えたところ、「ささ舟」のメンバーが参加しており、活用の申し出があった。
9月中旬	筆者らが現地を訪問した。「ささ舟」メンバーと話し合いの場を持つ。読み聞かせに必要なとしている絵本が手に入らない現状を把握した。
同月下旬	小木曾より連絡をとり、必要としている絵本のリストを作成し、送付を申し出る。「ささ舟」より絵本約40冊の希望リストが届く。
10月上旬	小木曾が、竹駒小等を訪問し、読み聞かせや被災後の生徒の様子等伺った。
同月中旬	「プロジェクト」より、「ささ舟」メンバーの仮設住宅へ30冊余を発送した。
12月上旬	竹駒小にて筆者らが読み聞かせ等を実施した。「ささ舟」メンバーもその様子を見学した。その際、メンバーより、エプロンシアター、ブラックシアターの要望と約30冊の希望リストを受け取った。あわせて次の訪問時には時間をとって読み聞かせ等の助言・指導をしてほしいとの要望を受けた。
同月中旬	「プロジェクト」より、「ささ舟」メンバーの仮設住宅へ20冊余を発送した。
	筆者らが行った「あゆっこ」での読み聞かせを見学した「ささ舟」メンバーより、その際に使用していた紙皿シアターの作製、使い方等について、筆者らに学びたいとの依頼があった。筆者らは、「あゆっこ」担当職員に、「ささ舟」メンバーに作製等を教えていただけるよう依頼した。
同月下旬	「プロジェクト」より、「ささ舟」メンバーの仮設住宅へエプロンシアター2種類とブラックシアターを発送した。
2012年 2月上旬	2011年12月中旬に発送できなかったリストの残りの絵本4冊を「ささ舟」のメンバーの仮設住宅へ発送した。
3月中旬	筆者らが現地訪問を予定している。
7月	「ささ舟」メンバーに対し、「プロジェクト」のメンバーが中心となり名古屋にて読み聞かせ等の研修を予定している。

5. 関係の構築とメンタルケア

(1) 関係の構築

表 I-1 および I-2 の「支援の経過」の通り、震災から3カ月がたった2011年6月より、筆者らは「プロジェクト」で培った絵本を用いての支援を模索し、被災によって活動に必要な絵本等を失った「あゆっこ」および「ささ舟」と巡り合うことができた。

佐藤 (2011, p.196) は、「被災地の人々を最も励ましているのは子どもたちの笑顔であり、哀しみを乗り越えて生きている子どもたちの姿である」と述べているように、筆者らが目指すところ子どもたちが笑顔になれる働きかけである。これまでに行ってきた読み聞かせ等にももちろん、直接子どもに働きかけることで笑顔をみせてくれる一面がある（読み聞かせ等の詳細はⅢを参照）。さらには、「当事者の支援もさることながら支援者（本稿における行為者）の支援が大いに大切」（福島, 2009, p. 41、括弧は筆者が記載）であり、「家族や日ごろ関わっている人が子どもと出来るだけ関わられるように支援することが大切」（片山、湯波, 2011, p. 20）と

なる。このことから、「あゆっこ」および「ささ舟」（行為者）への働きかけでは、それぞれが必要としている絵本等を届けるとともに、筆者らが現地へ赴き、読み聞かせや紙皿シアター等を実際に演じた。それは、「あゆっこ」および「ささ舟」の担当職員・メンバーの一時的な休息や、「あゆっこ」担当職員が子どもや母親に向き合う時間を確保できるように努め、さらに、「今後の読み聞かせの参考としていただけたら」との思いも込めながら行ったものである。

また、このように「あゆっこ」および「ささ舟」に対する支援を行ったのは、震災地域における支援では、日常の中で安心できる空間をつくっていくための支援が必要と考えたからでもある。大切な人や物を失った被災という悲惨な現状の中で、新たな意味を見出していくためには、イベント等、外部からの一時的な支援だけでは不十分であり、被災者が暮らす日常の中からの安心できる空間をつくっていくことが必要となる。この安心できる空間づくりを絵本等を通して行っていたのが、図 I-2 の行為者としての「あゆっこ」および「ささ舟」である。

図 I-2 行為者への支援

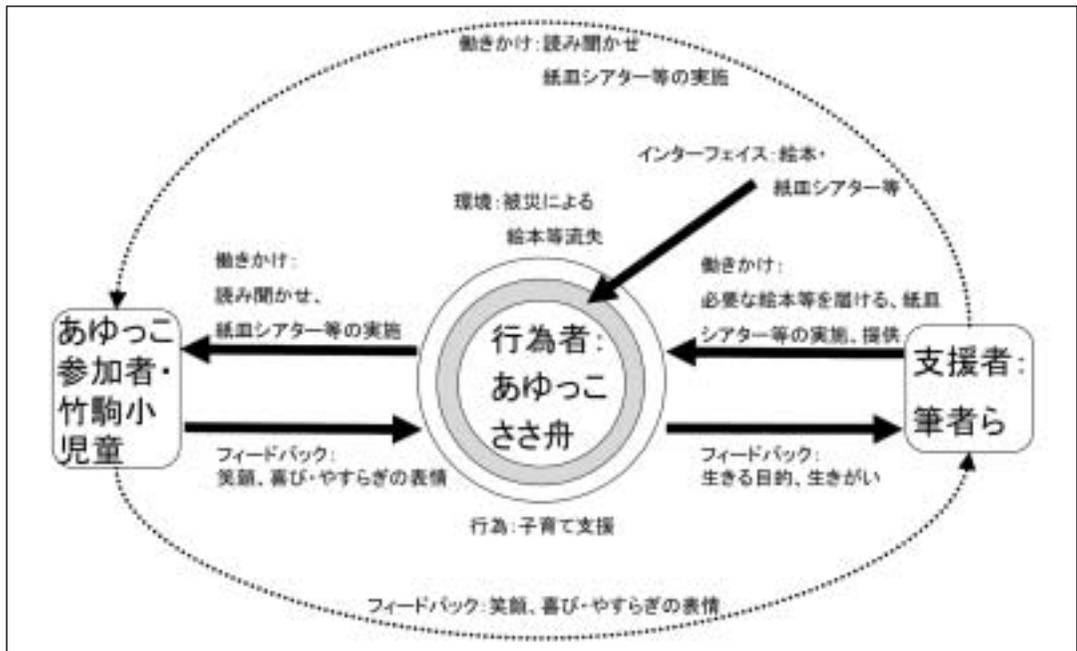


図 I-1 飯島 (1995)「支援の構図」を改変

しかし、「4. 支援先の概要」で述べたように、「あゆっこ」および「ささ舟」は被災という環境において、活動の場所と対象者に働きかけるもの（インターフェイス）としての絵本等を流失しており、筆者らは読み聞かせの実践とともに絵本等を送る支援を行う必要があった。そして、こうした支援が「あゆっこ」および「ささ舟」の活動を通して、「子どもながらに、環境の変化や、大人の都合を受け入れて生活をしている」（「あゆっこ」参加者・3歳女児の母親）子どもたちを笑顔にし、ひいては被災地の人々の励ましにつながっていくものと考えたのである。

また、特に筆者らにとって本稿の執筆はこれまでの支援を振り返る意味で非常によい機会であったと感じている。その理由は、直接的な子どもたちの笑顔（喜び・やすらぎの表情）だけではない。それは、支援を行う中で行為者の活動の質が高まったという結果報告や支援者の役割に対する期待、行為者からのお礼や感謝を得られたからである。すなわち支援活動の手ごたえをフィードバック（図I-2）してもらえたことが明確に認識できたからである。

## （2）メンタルケア

「（1）関係の構築」において支援者と行為者の関係の構築について述べたが、この関係の構築は、行為者が対象者としての子ども（児童）や母親に行う援助を、支援者が支えるためのものである。ここでの行為者の援助は、絵本の読み聞かせを主にしており、この活動は、「1. 絵本と読み聞かせ」で述べたように、対象者としての子どもが「やすらぎが得られるようになる」（岡山，2009，p.550）ためのものである。また、先に述べたように、筆者らが行為者に代わって対象者に読み聞かせ等を行うことにより、「あゆっこ」担当職員が、子どもや母親に直接向き合い彼らを支え癒すための時間を確保することもできる。

これらのことから、支援者が行う支援は、行為者が子どもや母親に対して行う心理的な支えとしてのメンタルケアを支援する活動というこ

とができるが、そのためには、関係の構築で述べた絵本等の寄贈や読み聞かせ等の実施だけでは不十分である。それは、行為者も同様に被災をしており、支援者は行為者の喪失感や孤立感などを支える関わり（傾聴など）が必要となるからである。（図I-3）

以上のことを踏まえ、次に、行為者が対象とする子どもや母親の状態、行為者の行うメンタルケアとそれに対する支援者の支援を述べる。

### 1) 「あゆっこ」での母親の語り

東日本大震災発生から5カ月後の2011年8月、筆者らが初めて「あゆっこ」を訪れたとき、2歳半の女児を持つ母親のAさんは、「子どもは、『これ、〇〇ちゃんと一緒だったね』などと、津波で亡くなった友達の話をよくする。どう答えていいのかわからない」「一時、おねしょをするようになった」「子どもはトイレの中で余震にあってから、トイレが怖い」「まだ子どもは小さく、震災（に伴ういろいろな出来事）をいつか忘れてしまうだろう。忘れてほしいという気持ちもある反面、忘れてほしくないという葛藤がある」と語った。そして、「非日常的な状況が続いているので、ホッとできる時間が欲しい」とも語った。

さらに2011年11月に、子育て支援の場である「あゆっこ」に通う母親の語りを、「あゆっこ」担当職員S氏の協力を経て得ることができた。この語りは、津波で大切な人を、大切な物を、そして家族が集った家を失った中で、幼い子どもたちと向き合う母親の語りである。語ってくれた母親は、それぞれ1歳女児を持つBさん・Cさん・Dさん、2歳男児を持つEさん、3歳女児を持つFさん・Gさん、2歳女児と6歳男児・8歳男児を持つHさんの7人である。

1歳女児の母であるBさんは、「悲しい顔をしているときなどはいっぱい遊んであげたり、声をかけてあげた。私はまだ前向きになれない」と語り、またCさんは、「停電が続いていたとき、常に布団に入ってスキンシップをとっていた。天気の良い日は散歩に行き、広々としたところで遊ばせるようにしている」と語っている。そ

して、Dさんは、「がれきだらけなので、一関市や平泉町（いずれも岩手県）に気晴らしにでかけた。私は泣いて暮らしたが、子どもに『笑顔でいたい』と逆に励まされた。寝る前に抱っこするのは、意識的に今でも続けている」と語っている。

2歳男児とその姉の母であるEさんは、「言葉につまるようになったのでゆっくり話を聞いてあげるように心がけた。お姉ちゃんは急に不安になるのかイライラしたり、泣き出したりするので、そんなときは抱きしめてあげると落ち着いた」と語り、そして「(私の) ストレスは解消されず、着々と蓄積中」とも語っている。

3歳女児の母であるFさんは、「後ろからくる津波を逃げるように山を登ったため、実際に水を目にしていな。だから、さほど津波を怖がる様子はなかったです。ただ、地震(余震)のほうは震災後しばらくは怖がって、わずかな揺れでもしがみつくようになりました。直後は赤ちゃん返りかなと思うようなしぐさもありました。今は『今度は波が来ないような高い所に住もうね』と子どもから言ったりしてマイナスな言葉ではなく、津波の体験を明るい未来に変換しているかのようなことを言っています」と語り、「我が家は父親と一緒にいないことでのストレスを与えてしまっているのかもしれないので、震災とダブルで子どもの心に負担をかけてしまっていると思います」「子どもながらに、環境の変化や、大人の都合を受け入れて生活をしています。一緒にいられる時間はスキンシップをよくとって、話をよく聞いて、向き合っています」とも語っている。

Gさんは、『『あゆっこ』が再開してからは、24時間おんぶしたままってことはなくなりました。お友達に会える毎日が良いんだと思います。私も他のママさんや先生と話すことで気持ちが和みます」と語り、「放射能はどれくらいの数値か詳しく発表してほしいし、何を食べさせれば良いかとか不安や憤りみたいなものがありました。今でも放射能のことは気になるし、大好きだった砂遊びができないとか、我慢させることもあるし、先の見えない子育てに不安はありま

す」とも語っている。

2歳女児と6歳・8歳の男児の母であるHさんは、「(2歳女児は)震災直後は、地震(余震)が来ると怖がる」、「(6歳男児は)震災直後、内陸に避難していたのに『津波が来る』と何度も言い、『来ない』と言っても信じなかった。(保育)園を2度変わったがその点ではショックは少なかったようだ。震災から今まで夜中、横にいないと起きてくるし、抱っこをせがむことが多い」、「8歳のお兄ちゃんは震災直後、次男同様、何度も言い聞かせて地図を見せても内陸まで津波が来ると心配していた。内陸の小学校に転校したが、登校を渋ったり学校まで一人でいけないときがあり、私が歩いて同行した。集団登校だったので近所の子どもに助けられた。学校では大きな音で、泣き叫んだり、教室でみんなとは一緒にいられず、職員室で過ごしたこともあった。当時は話さなかったが、休み時間も机に伏して力が入らない時期もあったそうだ。スキンシップを好み、隣で寝たがる」と子どもの様子を語っている。また、「現状は3人とも今は落ち着いている。とにかく『いつでもギューしたくなったら来ていいよ』と言ってるし、意識的に目を合わせたり、頭をなでたりしている。実際、以前より子どもをいとおしく感じる。就寝時も必ず隣で一緒に寝る。本当はそろそろ自立してほしいし、夫や姑(ともに被災者)はそれを勧める。けれど私はそれが少し心配。夫の長男への態度が冷たく感じる。よくいえば一人前に扱っている」と、子どもへの対応や思い、夫や姑の子どもに対する関わり方への思いを語っている。さらに、「震災後から今まで気持ちも生活も落ち着かず、しかし子どもにはきちんと、これまで通りに暮らせと要求してしまった。週末も日用品や生活を整えるために費やし、しかも、夫は家族で買い物に行きたがるので、(私は)休みが欲しいし、子どもは仮設の子どもたちと遊びたいし、で面白くない。でも買い物には行かなくてはならないし、家族揃う感じも欲しいし……。でも、皆が元気で生きていけているから、頑張らなくてね」と自身や家族に対する思いを語っている。

## 2) 語りからみる子どもの状態

前1)において「あゆっこ」に参加する母親は、子どもの情緒的な変化として、「急に不安になるのかイライラしたり、泣き出したりする」(2歳男児の姉)、「直後は赤ちゃん返りかなと思うようなしぐさ」(3歳女児)、「震災から今まで夜中、横にいないと起きてくるし、抱っこをせがむことが多い」(6歳男児)、「スキンシップを好み、隣で寝たがる」(8歳男児)と語っている。

また、「言葉につまるようになった」(2歳男児)という語りや、学校においては「登校を渋ったり学校までひとりで行けないときが」「教室でみんなとは一緒にいられず、職員室で過ごしたこともあった」「休み時間も机に伏して力が入らない時期もあった」(8歳男児)という語りもみられる。

さらに、「内陸に避難していたのに『津波が来る』と何度も言い、『来ない』と言っても信じなかった」(6歳男児)、「内陸まで津波が来ると心配していた」(8歳男児)という語りもみられる。

これらの語りは、ラファエルが被災した子どもの状態として述べている、①「きわめて幼少な子供も心痛や心傷を受けることは明らか」(Raphael=1995, p. 237)、「被災時にまだ2歳2か月だった子供さえ心傷を受けていることが実証されている」(Raphael=1995, p. 239)、また②「子供もまた死と破壊の恐怖を体験する」(Raphael=1995, p. 237)、さらに、③「親から離れることを怖がる」(Raphael=1995, p. 246)、「『幼児がえり』の結果、親からの分離の恐怖感が再現し、親のベッドでの慰安を求めたりするものが多い」(Raphael=1995, p. 246)ことと同様の子どもの状態を表している。

次に、「わずかな揺れでもしがみつく」(3歳女児)、「トイレの中で余震にあってから、トイレが怖い」(2歳女児)、「地震(余震)が来ると怖がる」(2歳女児)、「学校では大きな音で、泣き叫んだり」(8歳男児)という語りからは、ラファエルが述べている「ちょっとした外界からの暗示が引き金になって恐怖がよみがえる」(Raphael=1995, p. 244)状態を表している。

一方、「ささ舟」が読み聞かせを行っている小

学生においても、同様な状態が示された。この語りは2011年10月に関係者から伺ったものである。この語りからは、いまだに1週間のうちに3、4日眠れない子どもがいることや、いらいらするとか、周りの人が自分の気持ちを分かってくれないと訴える子どもがいることが表された。また、赤ちゃんがえりみたいな症状やお母さんにぴったりくっつく子ども、余震や雷に敏感になり暗い所を嫌がる子どもがいること。がれきの街を車で走るだけで吐く子どもがいることなどが表された。さらに他の小学校では、津波から逃げる途中で、あきらめてしゃがんだお年寄りたちが全員津波に飲み込まれていった状況を見ていた子どももいたことも表された。これらの子どもの状態は、子どもたちが非常にづらい現実を目の当たりにしたことから生じている。

## 3) 語りからみる母親の状態

1)において、母親は自身への思いとして、「非日常的な状況が続いているので、ホッとできる時間が欲しい」(Aさん)、「まだ前向きになれない」(Bさん)、「泣いて暮らした」(Dさん)、「ストレスは解消されず、着々と蓄積中」(Eさん)、「(放射能による)先の見えない子育てに不安」(Gさん)、「震災後から今まで気持ちも生活も落ち着かず、しかし子どもにはきちんと、これまで通りに暮らせと要求してしまった」(Hさん)と語っており、現実への悲観と不安を抱えながらストレスの中で暮らしている状況を伺うことができる。

## 4) 子どもや母親に対するメンタルケア

子どものメンタルケアに関しては、岩手・宮城内陸地震で避難所を訪問する等の活動を行っている、宮城県子ども総合センター所長で児童精神科医の本間博彰(2011, p. 99)が、「子どものメンタルケアで重要な視点は、子どもにとって意味のある大人」が有用な役割を果たすことを述べている。この「意味のある大人」を本間は「例えば担任教師や保育士など」と述べており、本稿では、震災以前から震災後に向け

て、子どもと日常的に接している「あゆっこ」担当職員や「ささ舟」のメンバーがこの「意味のある大人」に当てはまる。さらに、本間（2011, p. 99）は「意味のある大人」が、「少しの時間でも一緒に過ごすとか、本などを一緒に読むなどすることにより子どもはうれしいと感じる。こうしたサポートにより、自分が忘れられていないこと、自分が気にかけていること、ケアをしてくれる人がいるということを実感できることが、心の傷を受けることから守ってくれる」と述べている。この点からも「あゆっこ」担当職員や「ささ舟」のメンバーが行う絵本の読み聞かせ活動などは、子どもを支え癒し、そのメンタルケアを担っているということができる。

一方、母親への援助に関しては、子どもにとっての「意味のある大人」と同様に、母親をサポートする「意味のある隣人」としての援助専門職が必要となる。この「意味のある隣人」には「あゆっこ」の職員が当てはまる。2011年8月の筆者らの訪問時に「あゆっこ」担当職員は「母親を癒すことが大切」と語った。被害の状況が異なる中で、母親同士の間的气氛や遠慮などが生じた場合においても、個々の母親を受け止め日常的に支えていく専門職が必要となるのである。

さらに、1) においてGさんが語る、「(子どもは) お友達に会える毎日が良い」「私も他のママ

さんや先生と話すことで気持ちが和みます」との語りからも、「あゆっこ」がメンタルケアの場であることが表されている。それは、「(1) 関係の構築」においても述べたように、日常の中で安心できる空間がつけられていることが、メンタルケアの基盤となるからである。

### 6. 行為者への支援

行為者として子どもや母親に援助を行う「あゆっこ」担当職員や「ささ舟」のメンバーは、日常的な関わりの中で「意味のある大人」や「意味のある隣人」としての役割を担っている。しかし、「読み聞かせ活動再開に至るまでには亡くなった仲間、身内を失った仲間もいる。私たちも死ぬかもしれない思いをした。そこから立ち上がったきっかけは、何よりもがれきを見ながら登校せざるを得ない子どもたちがなんとか無事で成長してくれることを願っていたからこそです。それでもすべて失った喪失感、あのころはみんなで情けなくて泣いていましたね」と「ささ舟」のメンバーが語ったように、「あゆっこ」担当職員、「ささ舟」のメンバーも共に被災者である。さらに、自身の被災とともに、活動の手段である絵本や図書館を失い、そればかりか「あゆっこ」では、これまでの活動場所自体を失うことになってしまった。

このような喪失感や孤立感の中で、行為者が

図 I-3 行為者によるメンタルケア

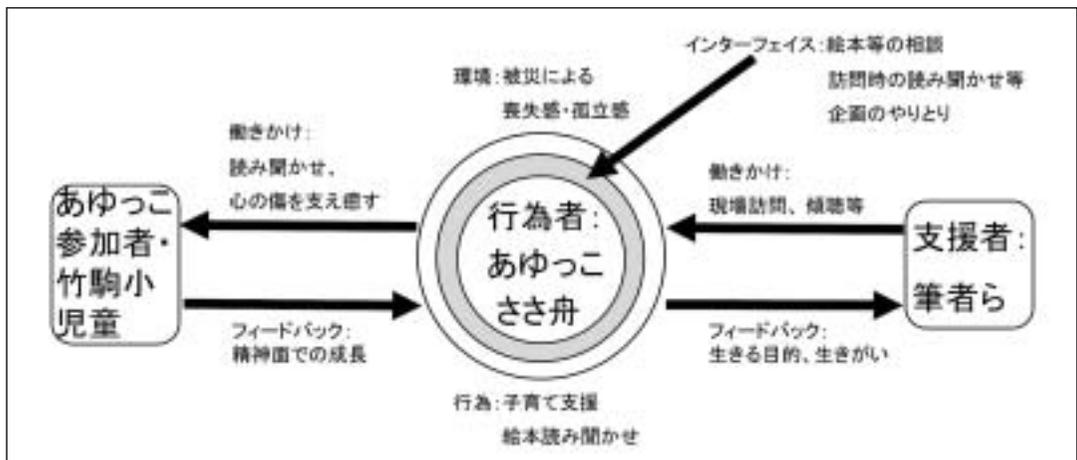


図 I-1 飯島（1995）「支援の構図」を改変

活動を行っていくためには、本間(2011, p. 99)が、「子どもにとって身近なところでケアをするスタッフをサポートすることが、最も子どもの心のケアになると考えられる。このようなスタッフをサポートするには、このスタッフが自分も支えられているのだ、と思えるようなかわりを我々がすることである」と述べているように、行為者自身が支えられていかなければならない。そのためには、筆者らが陸前高田市での子どもたちに対する読み聞かせ活動への支援を行ったように、支援者は、被災地でケアを行う行為者の活動の現場に赴き、行為者の言葉に耳を傾け、思いを受け止めるとともにそのニーズに柔軟に応じて、行為者の活動を支えていくことが必要となる。

## II 母子保健活動の現状と課題

### 1. 「丸ごと支援」の開始

「はじめに」でも触れたが、震災前の岩手県陸前高田市は、人口約2万4千人、日本百景の高田松原がある風光明媚な街であった。2011年3月11日に起きた東日本大震災により高さ20メートルもの津波が押し寄せ、市役所や商店街など丸々無くなってしまう未曾有の被害を受けた。市街地の86%が浸水、被災世帯は47.7% (全壊・大規模半壊) で都市機能が麻痺した状態となった。死者・行方不明者は1,851人 (岩手県 総務部 総合防災室ホームページ、2012年1月23日17:00時点)、しかも市職員 (嘱託職員含む) が110名余死亡、中でも母子保健を担う健康推進課保健師が7名中5名死亡・行方不明という惨事となった。

この惨事に名古屋市は陸前高田市の復興に向け、「丸ごと支援」(被災自治体に対し多岐にわたる分野での長期支援) を決定し、約30名の職員を派遣することとなった。そして、日高を含めた保健師2名が第1陣として、4月22日に陸前高田市 (健康推進課) へ派遣された。このころ健康推進課は、母子健康手帳の発行等を行うプレハブ仮庁舎と被災者の健康に関する保健師等支援チームの拠点である高田第一中学校に分か

れて活動、毎朝ミーティングの後は高田第一中学校へ移動した。

### 2. 被災者のニーズの把握

日高が派遣された時は被災後1カ月が過ぎ、被災者の安否確認を兼ねて保健福祉ニーズの全容を把握するために、ローラー作戦「第1回健康生活調査」が実施されていた。日高も市内の状況把握を兼ねて参加した。

この調査により、緊急対応に必要な、①高齢者要介護サービスが必要な事例、②三障がい者、③母子保健 (妊産婦、乳幼児) 事例をピックアップし、必要なサービス等を支援した。毎日80人以上の保健師らが活動し、住民の約85%を確認、被災者のニーズ集約 (現状把握) ができた。この結果を日本赤十字秋田看護大学・佐々木亮平助教と公衆衛生ボランティア・岩室紳也医師のコーディネートにより、岩手医科大学・坂田清美教授の協力を得て分析した。被災率が高い陸前高田市では、市内個人宅への避難者の割合が高く、しかもさまざまな健康の問題を抱えていることが把握できた。災害後の陸前高田市の保健活動のベースとして、この結果は非常に役立った。

### 3. 保健福祉におけるハイリスク者への訪問

この調査の終了時期から、日高は大船渡保健所・花崎洋子保健師より災害保健総括を引き継ぐことになった。神戸市の協力を得て、次なる

表II-1 継続支援が必要になるとされる対象者のスクリーニング (2011年5月16日から作業開始)

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>①65歳以上のひとり暮らし高齢者</li> <li>②75歳以上の高齢者のみ世帯<br/>(健康上問題のある事例では、一定年齢到達していても要支援として可)</li> <li>③治療放置や治療中断等の高血圧・糖尿病等生活習慣病患者</li> <li>④一人親世帯 (母子・父子)</li> <li>⑤乳幼児を抱え、育児不安のある親・祖父母等</li> <li>⑥コントロール困難なアレルギー患者</li> <li>⑦心のケアの必要な対象者 <ul style="list-style-type: none"> <li>・肉親を亡くした単身生活者 (特に男性)</li> <li>・震災孤児やその家族</li> <li>・不眠・不安・不定愁訴や心身症状のある人等</li> </ul> </li> <li>⑧その他、今までの継続事例</li> </ul> |
|---|

表Ⅱ-2 継続支援が必要になるとされる対象者

	1	2		3	4	5	6	7	8	9	
		65歳以上 独居	75歳以上のみ								
			人数	世帯数	生活習慣 病 他	一人親	育児不安	アレルギー	こころの ケア 他	その他	計
1	広田町	84	64	32	13	20	0	0	39	96	316
2	矢作町	87	105	51	10	12	0	0	20	7	241
3	高田町	165	124	60	72	43	0	1	87	0	492
4	米崎町	52	50	25	21	16	0	1	40	0	180
5	気仙町	22	26	12	7	0	3	0	23	20	101
6	竹駒町	33	60	35	32	10	0	4	29	33	201
7	横田町	48	71	33	9	6	0	0	17	4	155
8	小友町	36	67	33	64	9	1	0	53	0	230
9	計	527	567	281	228	116	4	6	308	160	1,916

2011年5月25日現在

災害保健活動の展開に移り、20,192人の調査から、8項目の継続支援が必要と思われる対象者をピックアップした(表Ⅱ-1・Ⅱ-2)。これらの対象者は、最初の調査で支援されておらず、保健福祉課題ではハイリスクと考えられる対象者である。5月16日から各保健師支援チームが調査票を抜き出した。

そして、約1カ月かけ、再度家庭訪問を実施、必要なサービスを提供しながら、再度アセスメントを実施していった。その結果、継続支援が必要な方を約6分の1の367件に絞りこんだ。しかし、こころのケアの必要な対象者は3分の1程度にしか減少しなかった。

#### 4. 母子保健事業の開始

震災直後から隣接する岩手県一関市、大船渡市、住田町の支援を受け、4月7日からは母子健康手帳、妊産婦健診、予防接種の受診券の発行を開始できた。また地域の助産師の協力を得て、保健師・助産師による新生児・乳児訪問を実施した。

しかし、市役所全体が大きな被害を受けている陸前高田市で母子保健事業を再開するのは容易ではなかった。4月下旬、健診等を実施する会場のめどが付き、予防接種と乳幼児健診の準備を開始した。ユニセフからポスターの作製やワクチン、ワクチン保管用の冷蔵庫・消毒器具などの寄贈を受けた。名古屋市も診察用ベッド、

スクリーン、積み木、絵本などを準備した。

6月1日から通常業務の準備が本格化するため、名古屋市2名の保健師は別々に活動を始めた。日高は主に災害統括を担い、もう1名の保健師は母子保健システムの再構築と乳幼児健診の準備に当たった。

その結果、6月2日からMRワクチン集団接種を、6月15日から1歳6カ月健診を開始することができた(写真Ⅱ-1・Ⅱ-2)。

写真Ⅱ-1 予防接種の再開



写真Ⅱ-2 2011年6月15日初めての1歳6カ月健診  
米崎保育園を借りて、4カ月ぶりのため45名来所



全員で問診する 震災の影響で不安定になった子どもが目立つ

ユニセフが遊び道具と絵本を提供してくれる

### 5. 震災後の子どもたちの課題

陸前高田市は、高齢化率34.9%、年間出生数が143人という地域である(表Ⅱ-3)。しかし、子どもを持つ親らは震災後、個別通知がなくても乳幼児健診に来所したり、自主的な子育てサークル「きらりんキッズ」も4月中旬に再開するなど、子育てに非常に熱心であった。7月から、8月末の全国各地から派遣された保健師支援チームの撤退に備え、陸前高田市保健師7名(名古屋市保健師2名を含む)が地区活動の引き継ぎのため、地区担当制をとった。

表Ⅱ-3 震災前の保健指標等

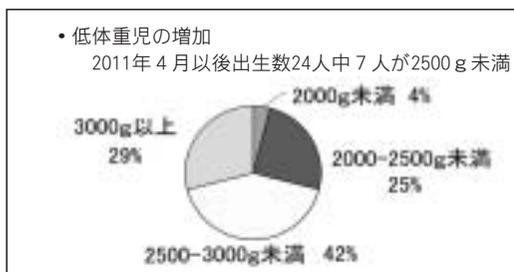
<ul style="list-style-type: none"> <li>年間出生数 126人(平成20年)、143人(平成21年)</li> <li>乳幼児死亡数 ゼロ</li> <li>高齢化率 34.9%(平成22年)</li> <li>死因 第1位 がん                      第2位 心疾患 第3位 脳卒中                  第4位 肺炎 第5位 自殺(11人)・老衰</li> </ul>
--

出典：・厚生労働省ホームページ「都道府県・市区町村別に見た健康診査－健康教育等 平成20年・21年分」  
・平成22年国勢調査  
・平成22年度陸前高田市保健事業報告

次に、震災後の母子保健事業について分析を行った。

まず新生児の状況については、震災後、低体重児が増えているようだと言保健師から報告が上がっていた。4月以後出生した24人中7人が2,500g未満の低体重児であり、震災のストレスによる切迫早産が増えていることをうかがわせた。しかし、6月以後は落ち着きを見せていった(図Ⅱ-1)。

図Ⅱ-1 震災後の子どもたちの変化  
(新生児、乳児)



次に震災後の1歳6カ月、3歳6カ月健診受診者76名の主訴を表Ⅱ-4に列記した。これより津波や余震に対する恐怖心などによる精神不安定な子どもが多くいることが見て取れる。また、市内には震災孤児が50名ほどいるが、祖父母や叔父叔母により育てられるなど環境の変化で今後も精神的な問題が考えられる。そのほかにも仮設住宅への入居が子どもへのストレスになっていることが見えてきた。

表Ⅱ-4 震災後の子どもたちの変化  
(1歳6カ月・3歳6カ月健診)

<ul style="list-style-type: none"> <li>2011年度実施 合計76名分の傾向</li> <li>震災により親が死亡し、親族が育児</li> <li>震災後精神的に不安定な子どもがほとんど</li> <li>震災後数カ月過ぎても、 「親から離れられない、後追いが激しい」6人 「必要以上におびえる、 小さい物音にもびっくりする」4人</li> <li>仮設住宅の生活で生活空間が狭くなり、ストレスが多い</li> <li>避難所生活によりお菓子を大量に摂取し、虫歯が増えた</li> </ul>
---

高齢化の進む陸前高田市では、被災者への支援が高齢者中心になっていたが、この結果が母子保健対策の強化につながるきっかけとなった。

### 6. 震災から半年後における母子保健活動の対応と課題

震災後半年が経過し、陸前高田市では通常の乳幼児健診と予防接種がようやく実施できるようになった。それを踏まえて、現状における課題を3点、以下にまとめた。

#### (1) 震災後、人手や施設の確保ができず、育児支援施策等が実施できていない

震災後の乳児健診での主訴にもあるように、子どもの不安定な状況がみられ、母親のストレスも高くなっている。健康推進課は、これらを支援していくため、気仙管内の助産師会とともに定期的な育児相談の実施を目指している。また、育児サークルとの連携を図り、育児不安のある事例について支援の幅を広げ、地域全体で支え合う体制をつくる必要がある。

また、「ママパパ教室」などは2012年度から実施できるように準備していく予定である。

(2) 震災により、乳幼児健診等母子保健に関する情報が流失、母子保健システムの再構築が必要

8月下旬に健康管理システムが導入されたが、予防接種以外の母子保健等のデータがなくなっていた。よって、これからの乳児健診や予防接種の結果を入力し、積み重ねていくことになる。9月より、名古屋市や一関市の母子管理システムを参考に母子保健管理システムマニュアルを作成している。

また、震災後住民票を移動せずに生活している市民が多く、固定電話を復旧できない人も多いため、居住先が把握できない状況にある。そのために、出産後4カ月までにすべての乳児宅に一度は家庭訪問すること、乳幼児健診の未受診者の追求システムをつくることを目指している。

(3) インフルエンザ等の感染症予防対策

震災後、6月ごろまで、インフルエンザの散発が見られていた。陸前高田市は、母親の就労率が高く、保育園へ入園する子どもが多くいる。また、2,000世帯ほどが仮設住宅へ入居し、今までとは違う市民の交流があり、集団発生の危険が高くなっている。今後もユニセフと協議し、どのような形で予防接種等対策をとるか検討していく予定である。

8月末で全国から支援に入っていた保健師チームが撤退、9月以降は陸前高田市保健師だけで活動している。被災率が高い中で、どのように効果的、効率的な対策を実施していくかが課題である。

Ⅲ 読み聞かせ等活動報告

一 陸前高田市での

絵本の読み聞かせ等プログラム

筆者らは、①2011年8月29日(月)－30日(火)、②9月12日(月)－13日(火)、③12月5日(月)－6日(火)の3度にわたり陸前高田市を訪問し、高齢者施設・知的障害者施設等、「あゆっこ」・竹駒小学校にて計10回の絵本の読み聞かせ等を実施した。

ここでは児玉が参加した②および③の中でも、「あゆっこ」・竹駒小学校において行ったプログラムに加え、被災地で子どもたちへの絵本の読み聞かせ等をするにあたって、プログラムの立て方で留意した点、聞き手の反応、配慮した点について述べたい。

1. 絵本の読み聞かせ等報告

(1) 2011年9月12日(月)「あゆっこ」

場所：米崎りんご学童（米崎小学校内）

参加：親子6組（1-3歳児と保護者）

(写真Ⅲ-1・Ⅲ-2参照)

写真Ⅲ-1



写真Ⅲ-2



写真Ⅲ-1・Ⅲ-2ともに  
読み手は児玉

<プログラム> (30分間) 読み手は4人(児玉含む)

	【種類】 内容	ね ら い	実 際 の 反 応
1	【わらべうた】 「くまさんくまさん」	最初に集中させる ・あいさつ	最初は、ミトンくまを出し、わらべうた「くまさんくまさん」であいさつ。演じる際、くまの後頭部あたりを見ることが、聞き手もそこに集中し、スムーズに始められる。

2	【絵本】 『おおきなかぶ』 (福音館書店)	参加してもらい和ませる	ロシア民話『おおきなかぶ』に母親からは懐かしいという声も。「うんとこしょ、どっこいしょ」を一緒に言ってもらおうよう促すと、引っ張る動作も一緒にしてくれた。参加型の読み方にして、場を和ませる。
3	【紙芝居】 『ニャーオン』 (童心社)	じっくり見る	子猫のニャーオンが月を取ろうと追っていく内容。静かな話でじっと見入っている。
4	【わらべうた】 「うまはとしとし」 「いちりにり」	くすぐり遊びを入れて発散	わらべうたで緊張を解く。「うまは…」母親の膝の上で子どもを揺すった後、「どっしーん」と落とすと喜んでいた。「いちり…」簡単なくすぐり遊び。お尻をくすぐると笑顔もみられる。
5	【小道具】 「出た出た月が」	集中	鉛筆を回すと封筒から月が出る仕掛けの出し物。大人も子どもも不思議そうに見ている。
6	【手袋人形】 「お月さま見てる」	人形で集中させ、参加	お月さまとうさぎの手袋人形を出すと、大人も興味津々。「べったんべったん」と餅をつくところは、一緒に掛け声を出してくれる人もみられる。
7	【パネルシアター】 「ちゅっちゅっこっこ」	じっくり見る	ちゅっちゅっこっこさん(不織布に描いた人形)が飛んでいったふりをして隠す。裏返して月の上にちゅっちゅっこっこさんがいると、「あー」と反応が返ってくる。
8	【パクパク人形】 「こぶたためき きつねねこ」	小道具で集中させる	パクパク人形を4人で持って歌を歌った。最後の「おしまーい」で人形の口を大きく開くと、笑いが起きる。
9	【紙皿シアター】 「へんしんあおむし」	小道具で集中させる	紙皿を回すと、あおむしがりんごを食べ、さらに回すとあおむしがちょうちょになる。見る側は興味津々。
10	【絵本】 『たまごのあかちゃん』 (福音館)	じっくり見る	じっくり見る子もいるが、このときに外で工事が始まり、音が気になる子も。
11	【わらべうたと布】 「じーじーぱっ」 「にーぎりぱっちり」	参加して和ませる	「じーじーぱっ」と顔を隠したり出したりする布あそび。透ける布を渡すと、一緒にやってくれた。「にーぎりぱっちり」は握りこんだ布を「びよびよびよ」と鳴き声に合わせて出す遊び。通常の遊び方をした後、『たまごのあかちゃん』に登場する動物を使いわらべうたの応用。
12	【わらべうた】 「さよなら あんころもち」	最後に締める・再会の意味を込める	大きなあんころもちを持って帰るために風呂敷を出すまねをすると、「おーっ」と反応があった。「さよならあんころもちまたきなこ」と歌うので、「はい、おしまい」ではなく「また、来ますよ。また、来てくださいね」という雰囲気終了。

※ 太字は十五夜にまつわる出し物

＜プログラムの留意点＞

この時期はちょうど中秋の名月で、十五夜のプログラムを依頼されていた。

プログラムの立て方としては、聞き手が集中してじっくり見たり、聞いたりするもの（絵本）と、声を出したり、動いたりするもの（紙芝居・わらべうたなど）をなるべく交互に行い、集中するものが続いて疲れないように考えた。ただ、今回は小道具類（紙皿シアター、パクパク人形など）の使用が多く、絵本の読み聞かせは2冊と少なめになってしまった。本来小道具類は、絵本の読み聞かせを集中して聞いてもらうための補助的な役割で、絵本の読み聞かせ等の中心にすべきは、絵本・わらべうた、紙芝居であると考えた。しかし、今回は「あゆっこ」担当職員より、「震災によって一緒に活動していた保育士さんがいなくなり、絵本の読み聞かせ等の企画が続かず困っている」と伺っていたため、絵本の読み聞かせ等の企画として今後も活用でき、かついろいろと応用ができそうな小道具（紙皿シアター・パクパク人形・布）を加えることとした。これらの使い方、やり方を実際に見てもらい、聞き手の反応も見ていただくことで、今後役立てていただくと考えた。同様に、わらべうたも簡単で覚えやすいものを選んだ。小道具は、「あゆっこ」担当職員に使っていただけるよう、差上げた。

なお、プログラムを組むにあたっては、まつい（1998）が述べているように絵本と紙芝居、それぞれの特性である

絵 本 ⇒ その世界に入ってゆく  
＝ 自己が育つ

紙芝居 ⇒ その世界が出てきて広がる  
＝ 共感する心が育つ

点を意識して行った。

＜当初のプログラムには入れたが

被災地で行うことを考慮し取りやめたもの＞

\*筆者らで検討

【絵本】『ちびゴリラのちびちび』（偕成社）

- 内容…赤ちゃんゴリラのちびちびは、周りの動物皆にかわいがられ、とても大きく

育つ。大きくなりすぎても、皆ちびちびが大好き。

- 取りやめた理由…周りの人にやさしく守られている、という内容だが、震災で家族や知り合いを亡くした子どもがいると周りに人がいないことを思い起こすかもしれないと考えたため。

【わらべうた】「こーこはとうちゃん」

- 歌詞…「こーこは とうちゃん にんどころ  
こーこは かあちゃん にんどころ  
こーこは じいちゃん にんどころ  
こーこは ばあちゃん にんどころ  
こーこは ねえちゃん にんどころ  
だいどーだいどー

こちょこちょこちょ」

と歌いながら、頬、額、顎・鼻の頭をやさしく触って、最後に顎の下をくすぐるわらべうた。にんどころとは似ているところの意。

- 取りやめた理由…皆に似ていて、皆のいいところを受け継いで、皆に守られている、と受け取れる。そのため、震災で家族を亡くした子どものことを考え、今回は入れるべきではない、と考えた。

＜所感＞

家族というテーマを避けたが、「あゆっこ」担当職員からいただいた、希望の絵本・紙芝居リストの中には『うちのかぞく』『うちのおじいちゃん』『うちのおかあさん』（世界文化社）など、家族そのものを描いた絵本も含まれていた。子どもたちは、絵本を読むことで、そのストーリーや主人公の体験を体験し、絵本によって失ったものを埋める効果もあるのではないかと感じた。

訪問等を重ねて、信頼関係が築けた際には、家族をテーマにした読み聞かせもできるであろう。

(2) 2011年12月6日(火)「あゆっこ」

場所：川の駅よこた

参加：親子8組(1-3歳児と保護者)

(写真Ⅲ-3・Ⅲ-4参照)

写真Ⅲ-3



写真Ⅲ-4



<プログラム> (30分間) 読み手は4人(児玉含む)

	【種類】 内容	ね ら い	実 際 の 反 応
1	【わらべうた】 「くまさんくまさん」	最初に集中させる ・あいさつ	ミトンぐまであいさつ。騒がしい雰囲気から集中へ。 じっくり見ている。
2	【絵本】 『まどからおくりもの』 (偕成社)	集中して見てもら う	じっくり見ている。
3	【紙芝居】 『よいしょよいしょ』 (童心社)	声を出して参加し てもらう	「よいしょよいしょ」と声を出して参加してくれる。
4	【紙皿シアター】 サンタ→箱→くま →ケーキ	小道具で集中させ る	「よいしょよいしょ」の掛け声の後、最後にサンタが登場。 サンタの袋から何が出るか興味津々。
5	【わらべうた】 「だーるまさん だーるまさん」	体を動かして発散 させる	体を左右に動かす、簡単なわらべうた。すぐ一緒になっ てやって体を動かす。
6	【ブラブラ人形】 「どんどんばしわたれ」 「おいっちにの だるまさん」	人形で集中しても らい、参加	ブラブラ人形を出した途端、子供たち2、3人が、前に出 てきて、かえるとくまの人形を持って行ってしまった。 集中してもらうことができなかった。残っただるまの人 形で「だるまさんがころんだ」まで演じる。
7	【大型絵本】 『だるまさんが』 (ブロンズ新社)	じっくり見る・ 一緒に動く	皆、反応がよい。だるまさんが横に大きく伸びたり、 「ぷっ」とおならをしたりすると同じ動きをする子も。お ならのところではお尻を突き出している子もみられる。
8	【わらべうた】 「ねずみねずみ どこいきゃ」	くすぐり遊びを入 れて発散	おかあさんにくすぐられると、声を上げて笑っていた。

9	【ペープサート】 ふうせん・クリスマス版	小道具で集中させる	丸く切った色紙と、その色から連想される物を描いた丸い紙を用意し、割りばしを裏表に貼り付ける。歌を歌いながら、くるくる回すと絵が見える仕掛け。果物などの当てっこをすることが多いが、今回はクリスマス版で制作。(黄色→星、緑→クリスマスツリー、茶色→トナカイ、赤→サンタクロース)
10	【わらべうた】 「うまはとしとし」	上下に動いて発散	時間が余り、わらべうた・手遊びを追加。「うまはとしとし」は前回行ったので覚えている人が多いようだった。家でも遊んでいたように感じた。
11	【手あそび】 「ららら ぞうきん」	体を刺激	子どもの体をぞうきんに見立て、歌に合わせてチクチク縫ったり、ジャブジャブ洗ったり、ゴシゴシこする遊び。刺激されてくすぐったがったりし、笑顔がみられる。
12	【わらべうた】 「さよなら あんころもち」	最後に締める・ 再会の意味を込める	今回のあんころもちもちは演じ手が違うため、前回とは動きが異なった。風呂敷は出さずに大きなあんころもちを「ばくっ」と食べて終了。楽しげな様子が伺えた。

※ 太字はクリスマスにまつわる出し物

### ＜プログラムの留意点＞

12月ということで、時節柄クリスマスに関するものを取り入れた。前回同様、「あゆっこ」担当職員への支援も念頭に置き、小道具（紙皿シアター・プラプラ人形・ペープサート）を作製、プログラムで演じた後、担当職員に差し上げた。「プロジェクト」から支援した絵本・紙芝居の中から、大型絵本『だるまさんが』(ブロンズ新社)と紙芝居『よいしょよいしょ』(童心社)もプログラムに加えた。『よいしょよいしょ』は、舞台を使わず、つなげて読む紙芝居である。そのため、演じ方を間違えると面白さが半減してしまうことから参考にしていただけるよう意識した。

『だるまさんが』は、さまざまなだるまさんがころんだ、が描かれた絵本。ただ、皆が思い描く「だるまさんがころんだ」は絵本の中にある。つまりだるまさんがころんだ、を知っていることが前提になっているため、ひとつ前のプログラムでだるまさんがころんだを演じておくと効果的である。わらべうたも参加のしやすさを優先し、簡単に覚えやすいものを選んだ。

### ＜当初のプログラムには入れたが

被災地で行うことを考慮し取りやめたもの＞

#### 【わらべうた】「大根一本こうてきて」

- 歌詞…「大根一本 こうてきて  
手足をしばって しおふって  
もんで もんで よくもんで  
なえたら うえから ちょんぎって  
おいしいところを たべちゃうぞ」  
と歌いながら、子どもの体を刺激するわらべうた。

- 取りやめた理由…歌詞の中の「ちょんぎって」で胴体を手刀で横にちょんちょんとたたたく動作が、体のつぼの刺激になるわらべうた。演じる前日、被災者の体験談を伺った際、「胴体や手足、首がちぎれた遺体をたくさん見た」との話があった。その後の練習で、演じ手から「このわらべうたのときには、その話を思い出してしまう」と申し出があり、その雰囲気聞き手にも伝わるとよろしくないと考え取りやめることとした。

## ＜所感＞

プログラム終了後、「あゆっこ」担当職員に「ちょんぎって」という言葉が歌詞に入っていることに対して気を遣うかを尋ねたところ「もう、あまり気にしない」とのこと。震災から9カ月経ち、被災者の方が、今まで語らずにいたことを語り出し、話を耳にする側の方が敏感になる時期かもしれない。

9月の訪問から3カ月経っていたが、前回に比べて保護者の顔も子どもたちの顔も明るく、反応がよいと感じた。2回目の訪問ということもあるのかもしれない。街をみると、信号機が設置され、仮設の店舗も増えており、生活がひとまず安定してきたことが大きいのではないかと感じた。このことは知的障害者施設を訪問した際に、前回の訪問時には反応が乏しかったとの報告を受けていたが、今回は非常に楽しんでいる雰囲気であったことから感じられた。

(3) 2011年12月6日(火) 竹駒小学校

場所：竹駒小学校多目的室

参加：全校生徒 59人

(写真Ⅲ-5・Ⅲ-6参照)

写真Ⅲ-5



写真Ⅲ-6



＜プログラム＞ (20分間) 読み手は4人(児玉含む)

	【種類】 内容	ね ら い	実 際 の 反 応
1	【絵本】 『よかったね ネッドくん』 (偕成社)	学年を問わず喜ぶ	笑いが起こる。
2	【ストーリーテリング・ 昔話】 『やぎとライオン』 『こども 世界の民話(上)』 (実業之日本社)	集中して聞く	集中して聞いている。 ヤギが「1万匹のライオン殺した」、と歌うと「怖いな」という声も聞かれる。
3	【紙芝居】 『ひもかとおもったら』 (教育画劇)	当てっこと意外性 を楽しむ	次々に答えを返してくれる。
4	【手遊び】 『落ーちた落ちた』	体を動かして発散	「知っている」とどの学年も楽しそうにやっていた。 高学年でわざと間違え、盛り上げてくれる生徒もいた。
5	【わらべうた】 「さよなら あんころもち」	最後に締める・ 再開の意味を込め る	「また、来ますよ」「また、来てくださいね」という雰囲気で終わった。「読み手4人が、大きなあんころもちを作っていたのが面白かった」と感想を述べてくれた生徒(2年生・男子)がいた。

＜プログラムの留意点＞

『よかったねネッドくん』は“よかった”と、でも、“たいへん”の繰り返しの面白さと、ネッドくんの現実ではありえない超人ぶりに、年齢を問わず笑いが起こる絵本。これで心の距離を縮める。ストーリーテリングを入れてほしいと、「ささ舟」から依頼されていたため、1年から6年まで揃って聞くことができる「やぎとライオン」を選んだ。『ひもかとおもったら』は場面の半分まで抜いたときに見える絵から想像するものと、全体が見えたときの落差が面白い紙芝居。ひもかと思ったら恐竜。リングかと思ったら、タコ。鏡餅かと思ったらお相撲さん、といった当てっこを楽しめる内容。「落ーちた落ちた、なーにが落ちた」で、「リング」なら両手で受け止める、「カミナリ」ならおへそを隠す、「ゲンコツ」なら頭を隠す、それぞれに合ったしぐさをする遊び。体を動かすので発散できる。

今回は、初めての訪問で、全学年が対象。しかも与えられた時間は20分。その中で打ち解けて、楽しんでもらえるようにプログラムを組んだ。具体的にはじっくり聞くものより、その場で反応が出やすいものを多くした。

ただ、その場での反応の出やすいもの、笑いが起こるものばかりがよいのではなく、一見、反応が無い、内容が乏しいように見えても、しっかりと子どもの心の中に残り、子どもたちが成長するうえで、困難に出合ったときに道を示してくれるような内容の絵本こそよりよいのではないかと考える。今回も時間がさらに20分あれば、こうしたじっくり聞くことのできる内容の絵本を入れたかったのが本音である。

今後も、筆者らが継続的、定期的に絵本の読み聞かせ等を開催できるならば、あまり派手に演出しない方が望ましいと考える。それは、派手なものに慣れてしまうと、じっくり聞いて想像する力が子どもの中に育たないのではないかと懸念するからである。

＜プログラムに取り入れるか

被災地で行うことを考慮し、迷った出し物＞  
【昔話】「やぎとライオン」

• 内容…ヤギが土砂降りにあい、ライオンの家で雨宿りをすることになる。

ライオンが、上機嫌でバイオリンを弾きながら

歌詞…「雨の降る日にゃ うちにいて  
うちにいて

雨の降る日にゃ うちにいて  
おいしい肉の おいでをまつさ」

と歌うのを聞いて、自分が食べられることを悟る。そこで、機転を利かせて

歌詞…「昨日殺した 1万匹のライオン  
1万匹のライオン 1万匹のライオン  
昨日殺した 1万匹のライオン  
今日は何匹殺そうか」

と歌い返す。ヤギが繰り返して歌うので、ライオンの方が怖くなって逃げ出すという話。

• 迷った点…内容の中にある「殺す」という言葉が気になった。しかし、小澤(2009, p.120)が述べているように、昔話の本旨は「架空の話、うそこの話であるから、とんでもないことが平気で起きます。そのとんでもないことをそのまま楽しんでくれよ」といったものである。昔話「やぎとライオン」は弱いヤギが強いライオンから知恵を使ってまんまと逃げる話であり、どうやって殺すとか苦しむといった表現も存在しない。また昔話には、主人公の身の安全が保証されることが大事な点であり、何があっても生き抜けというメッセージが込められている。これらを考慮した結果、プログラムとして取り入れることとした。

＜所感＞

「ささ舟」が行っている読み聞かせが根付いていることもあるのか、最初から集中して聞いてくれた。参加型の反応しやすいプログラムにしたことも影響していると感じた。

「やぎとライオン」は、ヤギがどんどん大きな声と早口で歌って、ライオンを追いつめていく

のを大方の子は楽しんでいたと思うが、ヤギの歌に対して「怖いな」との声が聞こえてきた時には、嫌がる生徒もいるかもしれないと肝を冷やした。

「ささ舟」メンバーによると、小学校ではまだ、家族をテーマにした絵本・紙芝居は避けているとのこと。高齢者サロンで筆者らが演じた紙芝居『おとうさん』(童心社<sup>注2</sup>)を見て、「ささ舟」メンバーは「小学校ではできない」とおっしゃっていた。乳幼児以上に小学生の方が事態がよく分かるだけに、配慮が必要ということを感じさせられた。

## 2. 全体の所感

2回の訪問、3回の絵本の読み聞かせ等を通じて感じたのは、人が一つの場所に集って、生の声で読み聞かせ、語り、そしてそれを見て聞くことが、その場にいる読み手、聞き手の両方を、とても楽しませ元気づけるということだった。読み手として参加した私たちも、聞き手が楽しんでくれる様子に心が弾む思いであった。

また、自分の経験、知識を被災者の支援者を支援することに役立てたいと思った。陸前高田市は市立図書館司書が全員亡くなられた。津波によって、司書の方々の経験・知識は受け継がれることなく失われてしまった。加えて、「あゆっこ」担当職員のような支援者、「ささ舟」メンバーのようなボランティアが、絵本や物が十分でない状態で、しかも少人数で奮闘している様子を目にするにつけ、こちらが学ばせていただくことも多かった。これからもお互い顔の見える支援を続けていきたいと考えている。

## おわりに

本稿では、東日本大震災の被災地である陸前高田市での子どもたちに対する読み聞かせ活動への支援、および母子保健活動に関して論じた。本稿で論じた、子どもたちを支えている「あゆっこ」担当職員や「ささ舟」メンバーへの支援、また、「あゆっこ」を通しての母親への支援、さらに母子保健活動を通しての子どもと母親への

支援は、子どもを取り巻く大人たちへの支援ということもできる。この支援は、高橋(2011, p. 29)が、『子どもこそ原点』が、この大惨事を超えていく物差しの起点ではないでしょうか。大人同士が手と手を取り合う姿を子どもたちに見せること。その姿を観た子どもたちは、自分の将来の生活に役立てることができただろう」と述べているように、被災地を生きる子どもたちの未来を支える活動の一つになっていると確信している。

なお、本稿Ⅰ・Ⅲで述べた絵本等の支援活動が継続できたのは、アジア子どもの家プロジェクトをはじめ、「あゆっこ」向けの絵本等の資金を提供してくださった自治労名古屋教育支部、ご寄付くださった皆さま方のおかげである。あわせて、「あゆっこ」担当職員、「ささ舟」メンバー、竹駒小学校の関係者をはじめとする数え切れない方々のご協力をいただいているからでもある。ここに筆者一同、感謝の意を表します。

(2012年2月上旬 脱稿)

## 【注】

注1) Ⅱの「母子保健活動の現状と課題」は、第58回日本小児保健協会学術集会(2011年9月2日、名古屋国際会議場にて開催)「東日本大震災フォーラム—被災地における子どもの成長発達を長期的に見守るために」における発表を基に執筆したものである。

注2) 『おとうさん』の内容は 魔物がおとうさんそっくりに化けて、坊やをさらおうとするが、機転を利かせた王様が本物と偽物を見分け、坊やを無事、本物のお父さんに帰すという話。

## 【引用・参考文献】

\* 飯島淳一(1995)「支援の定義」『「支援」概念の基礎づけに向けて』第1部第2章、  
<http://homepage3.nifty.com/hiway/sss/r95-ch2.htm>  
アクセス日2012年1月30日

\* 石田祐子(2010)「神奈川県立子ども医療センターにおける絵本を利用した取り組み」『医学図書館』第57巻第3号、p253-255

- \* 伊崎一夫 (2009) 「読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究—読み聞かせを取り入れた読解指導」『環太平洋大学研究紀要』第3巻、p46
- \* 伊藤淳一 (2002) 「現代の子どもたちと『昔話』」『小児保健研究』第61巻第1号、p28-33
- \* 今田高俊 (1994) 『混沌の力』講談社
- \* 岩手県総務部総合防災室「岩手防災情報ポータル」  
<http://www.pref.iwate.jp/~bousai/>(アクセス日2012年1月23日)
- \* 岡山ミサ子 (2009) 「『ケアする人ケアされる人—大人にとっての絵本』講演会を開催して」『看護管理』第19巻第7号、p.550
- \* 小澤俊夫 (2009) 『こんにちは、昔話です』小澤昔ばなし研究所
- \* 片山和子、湯汲英史 (2011) 『震災と心のケア—子どもの心の傷がPTSDになる前に』日東書院、p.20
- \* 菊池光昭、飯島淳一 (1995) 「『支援』概念の基礎づけに向けて—支援基礎論研究部会最終報告」『オフィス・オートメーション』第16巻第4号、p.90
- \* 小林 功『楽しい読み聞かせ改訂版』全国学校図書館協議会、2006年
- \* 佐々木亮平 (2011) 「東日本大震災支援レポート」『月刊地域保健』5-12月号
- \* 佐藤 学 (2011) 「教育にできること、教育ですべきこと」内橋克人編『大震災のなかで—私たちは何をすべきか』岩波新書、p.196
- \* 新村出編 (2008) 『広辞苑第6版』岩波書店
- \* 高橋千賀子 (2011) 「大震災を越えていく物差し『子どもこそ原点』被災地から学んだ子どもたち」『子どものしあわせ』第727号、p.25-29
- \* 野田文隆 (2011) 「災害と文化—こころ揺らぐ人々」内橋克人編『大震災のなかで—私たちは何をすべきか』岩波新書、p.202
- \* 福島真澄 (2009) 『地震地帯の小中学校教師へのサポート—当事者支援から支援者支援へ』こころの健康 第24巻第2号、p.41
- \* 本間博彰 (2011) 「岩手・宮城内陸地震の際に栗原市の避難所を訪問するなどして知り得たケアに関する知見について」『子どもと福祉』第4号、p.99
- \* 本間博彰 (2011) 「被災した子どもの発するSOSについて」『子どもと福祉』第4号、p.100
- \* まついのりこ (1998) 『紙芝居—その共感のよろこび』童心社
- \* 松居 友 (1986) 『私の絵本体験』大和書房
- \* 柳田邦男 (2001) 「いのちと共鳴する絵本」河合隼雄、松居直、柳田邦男『絵本の力』岩波書店、p.83-116
- \* 柳田邦男 (2005) 「おとなが読む—ケアする人、ケアされる人のために」『看護管理』第15巻第4号、p.298
- \* 柳田邦男 (2006) 『大人が絵本に涙する時』平凡社
- \* 吉川武彦 (2007) 『地震などの自然災害による心的外傷—その日本的特徴と癒し』こころの健康第22巻第2号、p.36-57
- \* Beverley Raphael (1986) WHEN DISASTER STRIKES:  
How Individuals and Communities  
Cope with Catastrophe, Basic Books, Inc., Publishers,  
New York. (=1995、石丸正訳『災害の襲うとき—  
カタストロフィの精神医学』みすず書房、p.341)
- \* 「第5回陸前高田市震災復興計画検討委員会資料復興計画案(基本構想)」  
<http://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/kategorie/fukkou/kentou-iinkai/5/kentou-iinkai-5.html>, 2011年11月30日開催、p.8、アクセス日2011年12月12日